

山田盛太郎『日本資本主義分析』戦後復刊版における三ヶ所差替の歴史的含意 —いわゆる「講座派の亡霊」批判論者との理論的交差—

中 根 康 裕

I 本稿の課題

山田盛太郎（1897年生-1980年没）著『日本資本主義分析—日本資本主義における再生産過程把握—』〔1934戦前初版/1949戦後復刊版/1977岩波文庫版初刷（＝山田生前版）〕（以下『分析』と略記）¹⁾は、明治維新変革を起点としアジア太平洋戦争における敗戦により歴史的生涯を終えた戦前〈軍事的—半農奴制的〉日本資本主義の社会経済構造をつかみ取り、構造に内包された基本矛盾をあぶり出し、その歴史的制限傾向を見極めると共に、危機を打開する主体を析出しようとした日本マルクス主義の古典的名著である。

1) 『日本資本主義分析』は1934年、岩波書店より刊行された（戦前初版）。その後1936年、発売不能となり、戦後1949年、岩波書店より三箇所だけ差替（その内の一箇所は帝国主義アメリカ占領軍の検閲に対抗しての差替）の上で復刊された（戦後復刊版）。また山田による生涯最後の校閲を経て1977年、岩波文庫版が刊行された（岩波文庫版〈初刷＝山田生前版〉）。尚、山田の没後、『山田盛太郎著作集』全五巻ならびに別巻が岩波書店より刊行されたが、その際に編集者により一箇所（山田自身の発意によって戦後復刊版で付加された「日本資本主義の根帯たる所の」と言う章句）削除の上で、同著作集第二巻に収載された（著作集版）。そしてこの一箇所削除に従って岩波文庫版からも同じ箇所が削除され、今日に至っている（岩波文庫版〈現行＝山田没後版〉）。

しかし私見では、同著作集第二巻における一箇所削除ならびにそれに従っての岩波文庫版からの同箇所の削除は、山田の本意に違背した不当な削除であり、岩波文庫版初刷＝山田生前版の復活が望まれる。尚、その理由については本稿の行論において示される。また併せて、中根〔2023〕67-68頁を参照されたい。

この点については、例えば『分析』でなされた戦前日本資本主義の特質把握に批判的な見地を有する大内〔2000〕も、『分析』以降のあらゆる論者の日本資本主義論は『分析』に対する賛否こそあれ全て『分析』の成果を出発点にしていると評価²⁾し、また『分析』の立論を継承発展させる基本見地に立つ原〔2016〕も、『分析』の刊行以降、その知的衝撃の輪は時間をかけて日本の社会科学全体に広がって行ったと評価³⁾している所である。

本稿は、かかる日本社会科学の古典、『分析』を次世代に継承する準備作業の一環として、『分析』戦後復刊版における三つの差替箇所を挙示し、各々の差替に関する山田自身の位置づけを検討し、その上で、各々の差替が持つ歴史的含意について考察することを課題とする。それにより『分析』各版の異同を歴史的文脈の中において把握したい。

尚、その際に本稿では、敗戦直後の占領下民主主義革命期日本において戦前の講座派の流れを汲む中からその「自己批判」として登場して来たいわゆる「講座派の亡霊」批判論者との理論的な交差、これを重視する視点に立って考察を加える。ちなみに本稿で「講座派の亡霊」批判論者として念頭に置いているのは、神山茂夫（1905年生）・小山弘健（1912年生）・豊田四郎（1914年生）・浅田光輝（1918年生）の諸氏の所論である。

彼らは敗戦直後、すでに戦前時点で『分析』批判の視座を獲得していた神山を筆頭に、その理論的影響を受けた関西の小山（「社会経済労働研究所」＝「社労研」を設立）、関東の豊田（「日本経済機構研究所」＝「機構研」を設立）および浅田（「機構研」に参加）らにより、当時の日本のマルクス主義理論戦線（日本共産党の理論活動を含む）における有力な理論潮

2) 大内力〔2000〕7頁

3) 原朗〔2016〕1頁

流の一角を形成した。そして、戦前講座派の理論的限界の克服なくして当面する民主主義革命に寄与し得る理論は構築できないとし、戦前講座派の理論的集約点と見定めた『分析』の立論全般に対して集中的な批判を展開した。

彼らは戦前講座派を「封建派」と特徴づけ、労農派のように戦前日本資本主義の考察に際して封建的な要素を軽視する議論に比べ、戦前講座派は日本資本主義の考察に際し、とにかく封建的な要素を日本資本主義の存立にとって致命的重要性を持つものと位置づけ得た点において理論的優越性を持つが、しかし、封建的な要素に支えられてのみ聳え立ち、封建的な要素の解体とともに自らも崩壊して行く資本主義として戦前日本資本主義を把握した点において致命的限界を持つとした。そして、その限界の理論的根拠を山田の『分析』における立論の仕方にも求めたのである。

その『分析』批判は激越であり、『分析』を「マルクス・レーニン主義の戯画化の最高峰」⁴⁾ と言い切ったが、そう記した「講座派の亡霊」批判論者の急先鋒たる豊田自身、戦前・戦中を通じて『分析』の深い影響下に理論的な営為を進めてきたこと、そして何よりもそうした豊田自身の理論的来歴への「自己批判」⁵⁾ として、『分析』を「理論的中核」とする「封建派理論」⁶⁾ への全面的な理論闘争を開始せずにはいられなかったことを切々と綴っている。ちなみに豊田は山田の17才年下に当たり、『分析』戦前初版の刊行時には20才の慶応大生であり、後に豊田〔1949〕の第1章第1節に「『封建派』の経済理論—『日本資本主義分析』の理論的偏向—」として収載される『分析』批判の小論を「1946.11.10」付で「病床にて口述」筆記し、『帝大新聞1006号』に寄稿した。労農派の流れからではなく、戦前講座派の流れの只中から『分析』批判の火ぶたを切ったこの小論の題名こそ

4) 豊田〔1949〕3頁。

5) 豊田〔1949〕「跋」187頁

6) 豊田〔1949〕「跋」186頁

「講座派の亡霊について」⁷⁾であった。

Ⅱ 『日本資本主義分析』戦後復刊版における三ヶ所の差替 — 挙示と検討 —

その刊行史上、『分析』は二度の検閲に遭ったが、その度に山田は検閲対抗の工夫をこらし、一字一句の伏字も無しに『分析』を世に送り続けた。第一回目の検閲は1934年の『分析』戦前初版刊行の際、絶対主義的天皇制官僚政府によるものであり、山田は「晦渋の語句」を含む独特の造語を多数駆使して潜り抜けた。その間の事情は『分析』岩波文庫版の「文庫版への序」に「ことさら不自然の形をとった」六つの語句の紹介と共に摘録されている⁸⁾。第二回目の検閲は1949年の『分析』戦後復刊版刊行の際、帝国主義アメリカ占領軍によるものであり、山田は差替指示を受けた箇所の差替を行い、虎口を脱した。その間の事情もまた同様に「文庫版への序」に摘録されている⁹⁾。山田はその何れの際にも、時の権力機構に対峙しつつ対抗的な工夫をこらし、吉原〔1984〕が言うように「学問」は「使命」であるという所信を貫いた¹⁰⁾。

従って当面、絶対主義的天皇制官僚政府の検閲を縫って刊行された『分析』戦前初版が1936年に「発売不能」¹¹⁾となって以降、アジア太平洋戦争での敗戦と占領下の民主主義革命の最中、帝国主義アメリカ占領軍の検閲に対峙しつつ1949年に『分析』戦後復刊版として甦ってくる、まさにその

7) 豊田〔1949〕10.30頁

8) 「検閲への顧慮」ゆえに「晦渋の語句」を用いた旨、記されている（『分析』「文庫版への序」6頁）。

9) 「占領軍の指示」ゆえに「一箇所改版」を行った旨、記されている（『分析』「文庫版への序」5頁）。

10) 吉原〔1984〕11頁

11) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）「文庫版への序」5頁

際に行われた三ヶ所の差替¹²⁾について検討することが課題となる。

なぜなら山田は、帝国主義アメリカ占領軍の指示に唯々諾々と従って受動的に差替を行ったのでは決して無く、むしろ帝国主義アメリカ占領軍の差替指示を逆手に取り、『分析』戦前初版の刊行以降の現実歴史の進行と、それを反映しての戦前日本資本主義把握をめぐる論争の深化—特にいわゆる「講座派の亡霊」批判論者の登場により熾烈化する所のそれ—とを睨み、自発的差替を二ヶ所にわたって行い、重要な理論的補強を行ったからである。また別に検閲対抗的な一ヶ所の差替においてさえ、叙述の深化に努めたからである。

そこで以下、二ヶ所の自発的差替、一ヶ所の検閲対抗的な差替、合計三ヶ所の差替を挙示する。その際、最初に差替前＝『分析』戦前初版の当該箇所を挙示し、次に差替後＝『分析』戦後復刊版のそれを挙示する。

その上で、各々の差替に対する山田自身の位置づけを検討し、さらに各々の差替が持つ歴史的含意を『分析』論争史との関連において考察する。

A【差替箇所①（山田の発意）：戦前日本資本主義の「根帯」に繊維産業を位置づける補強】

【差替前＝『分析』戦前初版の当該箇所】

●「ここで一言にすれば、養蚕、製糸、絹織（戦前初版ではこの語句は「綿織」と誤植されていたが、ここでは正しい表記に直してある—筆者注）の三分化工程を串（つらぬ）く絹業における所の危機的性質は、遥かに、米
国資本主義の搾取条件に繋がり、また、棉作、紡績、綿織の三分化工程を串（つらぬ）く綿業における所の危機的性質は、また、植民地国の民族的

12) 山田自身は『分析』戦後復刊版における三ヶ所の差替の内、「占領軍の指示」で差替を行った箇所については後に『分析』「文庫版への序」で「一箇所改版のよぎなきに至った」と言及したが、残る二ヶ所の山田自身による自発的な差替については特段の言及を行っていない。

抗争に繋がること。これが重点である。この点はまた一般的危機究明に対する重要な一視点となる」(『分析』戦前初版59頁)。

【差替後＝『分析』戦後復刊版の当該箇所】※二重下線を引いた部分が差替箇所

◆「ここで一言にすれば、日本資本主義の根帯たる所の、一方、養蚕、製糸、絹織の三分化工程を申(つらぬ)く絹業と、他方、棉作、紡績、綿織の三分化工程を申(つらぬ)く綿業との、両者における構成ならびに再編は、何れも世界資本主義の構造ならびに構造変化によって規定せられ、世界的激動の裡にその危機的性質が与えられること。これが重点である。この点はまた一般的危機究明に対する重要な一視点となる」(『分析』戦後復刊版59頁)。

【差替箇所①に対する山田の位置づけ】

この差替は、山田自身の発意による積極的な差替である。従って『分析』「文庫版への序」で言う所の「占領軍の指示」によって「一箇所改版」の「よぎなき」に至った箇所では無い。

この点について、やや立ち入って示せば、この差替は「占領軍の指示」による「改版」箇所の直前に位置する。しかし、山田が『分析』岩波文庫版の刊行へ向けて生涯最後の校閲を行った際、この差替箇所に直続している所の「占領軍の指示」による「改版」箇所が「復元」＝『分析』戦前初版の形に戻されたにも関わらず、この差替は校閲の後山田自身の発意により残置され、山田が存命中に行った最後の校閲を経た最終定本である『分析』岩波文庫版(初刷＝山田生前版)に記載されたのである。

尚、このような経緯があるにも関わらず、山田の没後、『山田盛太郎著作集』刊行の際、この差替箇所は『著作集』編集者により「占領軍の指示」による「改版」箇所と混同＝同一視されてしまった。そして山田自身の本

意に反して削除されてしまった。またその後、『著作集』に従う形で『分析』岩波文庫版からも読者への周知を抜きにして当該差替箇所は削除されてしまった。こうして「日本資本主義の根帯たる所の」¹³⁾ という差替箇所が削除されたものが、今、我々が市中の書店で手に取り得る『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）である。

それゆえ、現在の読者が『分析』岩波文庫版（現行版＝山田没後版）の南克巳「解説」における「根帯」への指摘¹⁴⁾ に止目し、南が指示する頁をいくら探しても当該章句を見つけることはできない。中根〔2023〕は以上の経緯を示し、「根帯」規定を収載した『分析』岩波文庫版（初刷＝山田生前版）復活の必要性を強く主張した¹⁵⁾。

【差替箇所①の歴史的含意】

この差替は、山田が『分析』戦前初版において綿業（棉作―紡績―綿織）ならびに絹業（養蚕―製糸―絹織）という二系列の繊維産業に対して与えた「本邦最重要産業」¹⁶⁾ という事実的な規定と、綿業での紡績業・絹業での製糸業に対して与えた「旋回小軸」¹⁷⁾ という〈生産力展開〉の契機に着眼しての概念的な規定と、その両規定を前提し、それに加え、日本資本主義の「根帯」＝「経済的動脈」¹⁸⁾ という〈再生産構造上に占める地位〉に着眼して概念的な規定を付与したものである。

すなわち『分析』戦前初版では、後藤〔2004〕が指摘するように〈生産力の発展理論とその担い手の解放理論〉へと反転して行く〈生産力論と危

13) 『分析』岩波文庫版（初刷＝山田生前版）86頁8行目に存置されている。

14) 『分析』岩波文庫版「解説」（南克巳）300頁5行目に「根帯」に関する指摘がある。尚この点、余談であるが筆者自身、今を去る40年前（1986年当時）、福島大学経済学部の学生として卒業論文を執筆していた当時、いく度読み返しても当該箇所を見つけられず、論文執筆の疲労の余り、筆者自身の眼がおかしくなってしまったかのような錯覚を覚えた事を、いま懐かしく思い出す。

15) 中根〔2023〕67-68頁

16) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）34頁

17) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）71頁

18) 『分析』岩波文庫版「解説」（南克巳）300頁

機論との結合¹⁹⁾ という『分析』の基本性格の発露として、本邦最重要産業たる繊維産業における生産力展開の契機として「旋回小軸」なる概念規定が導出され、繊維産業が戦前日本資本主義の再生産構造上に占める地位の概念化は一応措かれていた。

しかし山田は、『分析』戦前初版刊行以降の現実の歴史の推移、特に1930年代の綿織物を中心とする日本綿業の世界市場の席卷²⁰⁾ という『分析』戦前初版の展望を超える事実——こう記すのは、『分析』戦前初版では綿業における紡績業・綿織物業は主要輸出先の中国・インドでの民族資本の成長と「民族的抗争」＝民族独立運動の高揚を背景に「慢性的生産制限」に入り、一層の発展は困難と予測されていたから²¹⁾ ——と向き合い、『分析』戦後復刊版の刊行に際し、綿業を始めとする繊維産業を戦前日本資本主義の「根帯」＝経済的動脈として改めて位置づけ、再生産構造上に占める地位に関する概念規定を与え、綿業を始めとする繊維産業を再把握したのである。

その上で同時に、かかる「根帯」＝経済的動脈たる資格を持つ繊維産業すらも、後に「紡績機械」の「供出」＝紡績労働手段の「屑鉄化」²²⁾ へと追いつまれて行かざるを得ない、戦前〈軍事的半農奴制的〉日本資本主義の「運命的段階」²³⁾ の中に位置づけ返して行ったのである。

尚、その刊行以来90余年に及ぶ『分析』論争史において、この「根帯」規定について先駆的な考察を行ったのは長岡〔1980a〕である。そこでは以下の二点が主張される。①「根帯」は事物の土台・根底を意味する言葉で、繊維産業を日本資本主義の「根帯」と規定する事は、『分析』戦前初版での立論の要である「軍事機構＝キイ産業」に「旋回基軸」の規定を与える説

19) 後藤〔2004〕379頁

20) 大石〔1998〕228頁

21) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）86頁

22) 山田〔1964〕21頁

23) 山田〔1968〕101頁

と論理構成において齟齬をきたすという点。いま少し踏み込んで言えば、後年、山田が別稿で与えた繊維産業＝戦前「日本資本主義それ自体の基軸」²⁴⁾ という規定、このいわば繊維産業「基軸」説の「片鱗」が初めて示されたのが、繊維産業＝「根帯」規定であるとする点。②このような、『分析』戦前初版での「軍事機構＝キイ産業」＝「旋回基軸」説から『分析』戦後復刊版の繊維産業＝「根帯」規定（さらに後年の別稿での繊維産業＝「基軸」説）への遷移は、山田が戦後時点になって初めて戦前日本資本主義の再生産構造上における「外貨獲得手段」として繊維産業を位置づけた事に由来するとする点。これらが主張される²⁵⁾。

上述した長岡〔1980a〕の主張の内、筆者は、山田が戦後になって初めて戦前日本資本主義の再生産構造上における外貨獲得手段として繊維産業を位置づけ、それが『分析』戦後復刊版で繊維産業＝「根帯」規定へ結実し、さらにその後、別稿において繊維産業＝戦前日本資本主義それ自体の「基軸」規定へ昇華したという点について賛意を表す。

但し、繊維産業を戦前日本資本主義の「根帯」＝経済的動脈に位置づけ、再生産構造上に占める一層深い概念規定を行ったという事と、「軍事機構＝キイ産業」を戦前日本資本主義の「体制的」な「編成替え」を牽引する生産力展開上の「推進的起動力」²⁶⁾ という意味において戦前日本資本主義の「旋回基軸」に位置づける概念規定を行った事と、その両者の間に論理構成上の齟齬があるとは思われない。

この論点について中根〔2024〕は敷衍を試みているが、筆者の問題意識に照らすならば、山田はローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』の資本主義把握の方法を継承²⁷⁾ しており、戦前日本資本主義の〈純経済過程〉の側

24) 戦前日本資本主義の繊維産業に対し、山田が初めて「基軸」という規定を与えたのは、山田〔1964〕14頁においてである。

25) 長岡〔1980〕42-44頁

26) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）122頁

27) 中根〔2024〕175-177頁

面における繊維産業の外貨獲得＝再生産過程維持のための経済的動脈たる「根帯」としての地位と、戦前日本資本主義の〈政治的暴力〉の側面における新たな生産力展開の契機としての「軍事機構＝キイ産業」の「旋回基軸」としての地位と、かかる両者の統一的把握を企図しており、この『分析』の方法を一層明瞭に示したものとして理解すべき事柄と考える。

さらに『分析』論争史上における論敵の主張との関連で言えば、このように山田が『分析』戦後復刊版で繊維産業を戦前日本資本主義の再生産構造上の経済的動脈＝「根帯」として鮮明に打ち出した歴史的含意としては、上述した『分析』戦前初版刊行後の現実歴史の進行を見極めての補正という意味の他、尚、特殊に、占領下民主主義革命期の日本において熾烈化した『分析』の立論をめぐる論争、特に『分析』批判の急先鋒たる「講座派の亡霊」批判論者が提起した論点、それに対する山田の応答という意味を併せ持つと思われる。

この点を若干敷衍すれば、「講座派の亡霊」批判論者は『分析』の立論を全線にわたって批判し、分けても戦前日本資本主義の自生的発展の評価と関連し、彼らの拠って立つレーニンの国内市場形成理論（レーニン『ロシアにおける資本主義の発達』〔1899〕基準）の視角から、『分析』では戦前日本資本主義「発展」の「物質的基礎」が余りにも「政府」による上からの「創出」²⁸⁾に収斂され過ぎていると批判した。

なぜならば、山田は『分析』第2編「旋回基軸。軍事機構＝キイ産業の構成」の原初稿である『日本資本主義発達史講座』第5回配本論文「工場工業の発達」の執筆途上で『講座』第4回配本「月報」に寄せた小論「断章—日本資本主義考察に於ける一つの視角」において、戦前日本資本主義を「強力的に設定せられた軍事的財閥的資本主義」²⁹⁾と特徴づけていたからである。そしてこの「軍事的財閥的資本主義」を「設定」した「強力的」

28) 神山〔1947〕75頁

29) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）215頁

主体こそ、天皇制「軍事的警察的絶対主義」国家「機構」³⁰⁾であるとしたからである。

しかしこれこそ、レーニン『ロシアにおける資本主義の発達』の理論的な線上に立ちつつ、戦前日本資本主義を国内市場形成の契機において把握しようと企図する「講座派の亡霊」批判論者にとっては何としても看過し難い点であった。それゆえ「講座派の亡霊」批判論者は、『分析』は国家権力が資本主義を「創出」したとする論理に立つゆえ、国营軍事工業に過大な評価を与える一方、逆に、資本主義の下からの・自生的な発展の中心をなす繊維産業の過小評価に陥っていると批判したのである。

この批判に対し、山田は『分析』戦後復刊版で繊維産業を日本資本主義の再生産構造上の経済的動脈＝「根帯」として再規定することを通じ、間接的にこの論点への応答を行ったと考えられる。山田はこう言いたかったのではなからうか、曰く、私は繊維産業の発展を決して軽視していないし、それらが再生産構造上に占める重要性も知悉している、まさしく戦前日本資本主義の「根帯」である、しかし、かかる「根帯」産業すら最終的に「屑鉄化」に追い込まれた点にこそ、〈軍事的一半農奴制的〉的日本資本主義の全構成の矛盾の核心を見るべきなのではないか、と。

B【差替箇所②（検閲対抗）：「世界資本主義」の「構造変化」に繊維産業の危機的性質を見る補強】

【差替前＝『分析』戦前初版の当該箇所】

●「ここで一言にすれば、養蚕、製糸、絹織（戦前初版ではこの語句は「綿織」と誤植されていたが、ここでは正しい表記に直してある一筆者注）の三分化工程を串（つらぬ）く絹業における所の危機的性質は、遥かに、米

30)『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）「文庫版への序」5頁

国資本主義の搾取条件に繋がり、また、棉作、紡績、綿織の三分化工程を串（つらぬ）く綿業における所の危機的性質は、また、植民地国の民族的抗争に繋がること。これが重点である。この点はまた一般的危機究明に対する重要な一視点となる」（『分析』戦前初版59頁）。

【差替後＝『分析』戦後復刊版の当該箇所】※二重下線を引いた部分が差替箇所

◆「ここで一言にすれば、日本資本主義の根帯たる所の、一方、養蚕、製糸、絹織の三分化工程を串（つらぬ）く絹業と、他方、棉作、紡績、綿織の三分化工程を串（つらぬ）く綿業との、両者における構成ならびに再編は、何れも世界資本主義の構造ならびに構造変化によって規定せられ、世界史的激動の裡にその危機的性質が与えられること。これが重点である。この点はまた一般的危機究明に対する重要な一視点となる」（『分析』戦後復刊版59頁）。

【差替箇所②に対する山田の位置づけ】

この差替は帝国主義アメリカ占領軍の検閲により、「絹業」の「危機的性質」が遥かに「米国資本主義」の「搾取条件」に「繋がり」行くと記されていることを以て差替指示を受けたことに対し、山田がそれに対抗するために行ったものである。そして後に『分析』岩波文庫版（初刷＝山田生前版）の刊行に際し、山田の校閲を経て『分析』戦前初版の形へと「復元」された箇所である。

すなわち『分析』「文庫版への序」で「復刊に際して、占領軍の指示によって一箇所改版のよぎなきに至った」と言われた、まさにその箇所である。山田には、自らの発意により行った他の二ヶ所の差替に対する言及の必要性は感じられずとも、帝国主義アメリカ占領軍の弾圧下に行わざるを得なかったこの差替についてだけは何としても文字に刻んでおかねばならないと感じられたのである。

【差替箇所②の歴史的含意】

この差替は、他の二箇所の差替とは性質が根本的に異なる。敗戦日本での占領下民主主義革命の高揚、中国における新民主主義革命の進展、ベトナム八月革命の勝利など、東アジアの民族独立革命の巨大なうねり、それを阻もうとする世界反動の砦＝アメリカ帝国主義、この世界史的対抗の只中における帝国主義アメリカ占領軍の検閲と差替の指示、それを受けて対抗的に行われた差替である。

すなわち『分析』戦前初版では、紡績業を「旋回小軸」とする綿業の「危機的性質」は中国・インド等「植民地国」の民族資本発達と「民族的抗争」＝民族独立運動の高揚に繋がり、また製糸業を「旋回小軸」とする絹業の「危機的性質」は「米国資本主義」の「搾取条件」＝恐慌の影響を最も深く蒙る所の資本家階級の奢侈品購買力への依存に繋がる³¹⁾、そのように明示された箇所である。そしてこの点にこそ帝国主義アメリカ占領軍の検閲の刃も向けられたのである。

山田は帝国主義アメリカ占領軍による検閲と差替指示を受け、『分析』戦前初版における「米国資本主義」の「搾取条件」と「植民地国」の「民族的抗争」という繊維産業の危機的性質に関する具体的な指摘を、「世界資本主義」の「構造変化」がもたらす「世界史的激動」によって繊維産業の危機的性質が与えられるとする抽象的な指摘へと置き換えた。これは山田にとって万止むを得ざる後退措置であった。この時、山田は農地改革中央委員として日本の歴史上「貞永式目（1232年）」で「鎌倉府」が「確立」³²⁾して以来、七百年余におよび「隷農制的＝半隷農制的従属関係」を「再出」³³⁾させて来た地盤である日本地主制を根本的に打破するために全力を傾けて

31) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）86頁

32) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）「年表」266頁

33) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）229頁

おり、その限り、アメリカ帝国主義との全面的な理論的対決はこれを将来に遷延しなければならなかったからである。

しかし山田は同時に、「世界史的激動」をもたらすような「構造変化」を生み出す動因を内包する一個の「構造」体として「世界資本主義」を把握しなければならない旨、この時に改めて問題提示し、併せてかかる「構造変化」は現下に進行中であると指摘し、世界資本主義が「構造変化」——〈冷戦帝国主義〉³⁴⁾ 段階への推転——の歴史的起点に立っている事を衝いたのである。

尚、ひとつの有機的「構造」を有する「世界資本主義」として資本主義世界体制を把握する見地、また、この世界資本主義の「構造変化」がもたらす「世界史的激動」が戦前〈軍事的-半農奴制的〉日本資本主義の「根帯」たる繊維産業に「危機的性質」を与えると把握する見地、こうした見地は『分析』戦前初版における「世界史的連繫」³⁵⁾ 下に戦前〈軍事的-半農奴制的〉日本資本主義の「世界史的低位」³⁶⁾ を把握しようと企図する見地の再度の確認であると受け止められる。

この点、「講座派の亡霊」批判論者はその拠って立つレーニン国内市場形成理論の視角から一国次元で戦前日本資本主義の自生的発展の契機を問うたが、資本主義世界体制の帝国主義的発展段階が招来する圧倒的な世界史的規定性の問題を捨象³⁷⁾ したまま、一国次元での資本主義発展を言うその

34) 南〔1970〕が第二次世界大戦後の資本主義世界体制に対して与えた歴史具体的な段階規定である。

35) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）「凡例」11頁

36) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）「序言」9頁

37) この、資本主義世界体制の発展段階とそこから来る圧倒的な世界史的規定性の問題を捨象して一国次元での資本主義発展を追跡しようとする方法論は、豊田〔1949〕において際立っている。豊田は昂然と言う、「われわれは資本主義発展の二つの方向」の内の「広さ＝横〈外国市場のこと一筆者注〉への発展」を「抽象」することが「必要」だと。なぜなら「市場理論」は「深さ＝縦〈国内市場のこと一筆者注〉への発展のみ」に「関する」からだ。

方法論が、果たして現実を切開する十全な理論的武器たり得るのか、山田の世界資本主義構造把握の視角との理論的懸隔が問われる所であろう。

C【差替箇所③（山田の発意）：1935年講演「再生産表式と地代範疇」の「特殊具体の部」を要約提示する補強】

【差替前＝『分析』戦前初版の当該箇所】

●「尚、『我国農業が夙に封建的自然経済の旧套を脱して市場本位的の商品経済の一環を成していることは事実であって、その限りにおいて農業だけが一般産業循環の外に立つということは不可能であり』として日本農業を『交換価値』本位、『商品』本位の『市場本位農業』となす常套的の偏見（一例、有澤廣巳『統計上より見たる農村窮乏』、中央公論、昭和七年七月号、所収、引用は同著『日本経済統計図表』、下、経済学全集、第三十四卷、昭和七年九月刊、一〇一、一一一頁）は、さきの見地の一反復と相通ずる。ナロードニキは再生産論簡素化において、資本主義解消の方法で、旧露『軍事的封建的帝国主義』の基本構造＝矛盾の抹消に至り、逆に、ここでの見解は、再生産論固定化において、半隷農制解消の方法で、軍事的半農奴制的な当該資本主義の基本構造＝矛盾抹消に通ずる」（『分析』戦前初版192-193頁）。

そしてさらに続けて言う、「中央集権的官僚権力」を「体现」する「軍事機構＝キイ産業」もまた同様に「方法的に抽象」することが「重要」だと。なぜなら「国家権力」＝「軍事機構」は「階級関係・経済関係・生産様式」に「反作用」を「あたえる」からだ。その上で豊田はまとめて言う、このような捨象を通じてこそ、「資本主義の歴史的な内部構造の諸特徴を、外来的副次的諸事情の影響からきり離し、その単純な基本形態において把握しうる」のだと（豊田〔1949〕72頁）。

本稿筆者が、この豊田の方法論上の問題提起に接して想起するのは、繰り返す、具体的なものの具体的な分析こそが弁証法の魂＝生命線だと強調したレーニンの警句である。少なくとも、無限の多様性を持つ・現実の戦前日本資本主義分析の方法として「外国市場」と「軍事機構」の問題を捨象することが適切とは思われない。

【差替後＝『分析』戦後復刊版の当該箇所】※二重下線を引いた部分が差替箇所

◆「日本資本主義の場合、一面、それは高度の軍事的＝独占的、資本主義の構造をとってきているに拘わらず、他面、その基柢に、半封建的土地所有制＝半隷農的零細農耕の構造をもち、かくして軍事的半封建的資本主義としての構成が成立しており、以上の基本構成は、例えば、旧露資本主義の場合、一面、広大なミールの構造と農奴制の直接的残存たる雇役制度にも拘わらず、他面、その基盤の上に、高度の独占資本主義の構造が発展し、かくして軍事的封建的な資本主義の特殊構成が成立しているのと正に照応する。ナロードニキは再生産論簡素化において、資本主義解消の方法で、旧露『軍事的封建的帝国主義』の基本構造＝矛盾の抹消に至り、逆に、ここでの見解は、再生産論固定化において、半隷農制解消の方法で、軍事的半農奴制的な当該資本主義の基本構造＝矛盾抹消に通ずる」(『分析』戦後復刊版192-193頁)。

【差替箇所③に対する山田の位置づけ】

この差替は山田自身の発意による積極的な差替であって、『分析』「文庫版への序」で言う「占領軍の指示」により「改版」した箇所では無い。しかも『分析』戦後復刊版における三箇所の差替の内最大の差替箇所である。ゆえに『分析』岩波文庫版の刊行へ向けて山田が生涯最後の校閲を行った際にも、この箇所は当然にも残置され、校閲を経た最終定本たる『分析』岩波文庫版(初刷＝山田生前版)に収載された。

尚、参考までに。大島〔1982〕はこの差替を「苦節を分かつ友人(有澤廣巳一筆者注)への配慮」³⁸⁾によるものとし、学問的理由に発するものでは無いとしたが、失当である。なぜなら、第一に、山田の学問に対する姿

38) 大島〔1982〕2頁

勢は親しい友人＝有澤廣巳の所論であるという理由により必要な学問的批判を控えるという次元には無い。第二に、もしこの差替が「苦節を分かつ友人への配慮」によるものと仮定しても、それではどうして、同じ講座派系統の研究者であり、敗戦直後に山田と共に農地改革中央委員になった別の友人＝近藤康男への批判箇所³⁹⁾はそのまま残されたのか、どうしてもつじつまが合わなくなる。

それゆえ、この差替に関する山田自身の位置づけを測る際には、有澤廣巳の所論を批判した箇所だから差替を行ったと言うような先入観を捨て、全く別個の学問的理由があり、その理由に照らし、この箇所では差替を行う事が最善と判断されたからであるという見地に立つべきである。それではその具体的な学問的理由とは何か。それはこの差替に直続する一文を見る時、明瞭となる。そこには「ナロードニキは再生産論簡素化において、資本主義解消の方法で、旧露『軍事的封建的帝国主義』の基本構造＝矛盾の抹消に至り、逆に、ここでの見解（日本農業の資本主義的な進化を認める労農派的な見解―筆者注）は、再生産論固定化において、半隷農制解消の方法で、軍事的半農奴制的な当該資本主義の基本構造＝矛盾抹消に通ずる」⁴⁰⁾という章句が位置している。山田は『分析』戦後復刊版の刊行に際してこの章句の抜本的な補強が必要と考え、その直前に位置していた有澤廣巳批判の箇所の差替を決断したのである。

それでは、山田をしてかかる決断へと赴かしめた事情とは何か。当時、山田『分析』は戦前来の労農派による批判の矢面に立つ一方、特に、戦前講座派の系統内部から生じてきた「講座派の亡霊」批判論者の矢面にもまた立っていた。「講座派の亡霊」批判論者は『分析』に対して理論的砲火を集中し、『分析』に対して「マルクス・レーニン主義の戯画化の最高峰」という表現まで用いて指弾した。世上、山田はかかる批判の一切に対し、終

39) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）235頁

40) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）236頁12-15行目

始沈黙を守ったと伝えられている。しかし、本稿筆者はこの差替こそ、山田が「講座派の亡霊」批判論者に対して放った反批判の核心的な一矢であったと考える。

なぜなら、有澤廣巳批判に代えてこの箇所に入れた章句こそ、山田が『分析』戦前初版刊行の翌1935年冬、東大経友会で行った講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」⁴¹⁾の第二部をなす「特殊具体の部」⁴²⁾の結論の要約と言い得るものであったからである。そして、この「特殊具体の部」では旧ロシア資本主義と対比させつつ戦前日本資本主義の把握が端的に試みられており、「講座派の亡霊」批判論者の戦前日本資本主義の把握の仕方に対する反批判の役割を担い得る内実を有していたのである。

【差替箇所③の歴史的含意】

この差替は、『分析』を「マルクス主義の戯画化の最高峰」と指弾した「講座派の亡霊」批判論者たちに対して山田が放った反批判の核心的な一矢である。

ここで、当該差替の歴史的含意の考察に進む前に、読者の便に供するため、まず「講座派の亡霊」批判論者の所論の核心を筆者なりに紹介する。それは彼らの実践的要請に発する問題意識の深みに規定され、戦前日本資本主義把握の全線におよぶ体系性を持っている。

今、その三大支点たる国家論（敗戦まで日本国民とアジア諸国民に対し

41) 山田〔1947=1984〕47頁の「付記」によれば、山田は『分析』戦前初版刊行（1934年）の翌年（1935年）12月、「東京帝国大学経済学部経友会」の「主催」において講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」を行った。その「第一部」は「理論の部」であり「ケネーの経済表からマルクスの再生産表式への発展の理論的ならびに歴史的根拠」の究明を課題とし、続く「第二部」は「特殊具体の部」であり「旧露と日本資本主義との構造の把握」を課題とした。

42) この「特殊具体の部」を含む、当該講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」全体の「講演 手控え」が『山田盛太郎著作集』別巻3-8頁に収載されている。

て無制限の暴威を振り得た天皇制権力をいかに把握するべきか) — 資本主義経済構造論 (天皇制権力下の戦前日本資本主義の諸特質をいかに把握するべきか) — 農業問題論 (戦前日本資本主義下における農業部門の資本主義的發展可能性の有無をいかに把握するべきか) において、彼ら「講座派の亡霊」批判論者の立論を見る。以下がそれである。

①「講座派の亡霊」批判論者の国家論：戦前の「絶対主義的天皇制」国家は〈レーニンの「軍事的封建的帝国主義【軍・封・帝国主義】」〉であるという理解を決定的な立論の軸とし、その上で、戦前日本帝国主義をかかると〈レーニンの「軍・封・帝国主義」〉と〈独占資本主義の「近代的帝国主義」〉との相克的並立の体制＝「二重の帝国主義」⁴³⁾として把握する。

②「講座派の亡霊」批判論者の資本主義構造論：〈レーニンが旧ロシア資本主義の分析に用いた国内市場形成理論〉を決定的な立論の軸とし、その上で、戦前日本資本主義を〈国内市場形成＝発展の度合い〉を基準としながら〈資本主義を支配的経済制度とする所の諸経済制度 (ウクラッド) の複合体〉⁴⁴⁾として把握する。

③「講座派の亡霊」批判論者の農業問題論：〈レーニンが定式化した「農業における資本主義的發展の二つの道」の理論〉⁴⁵⁾を決定的な立論の軸とし、その上で、戦前日本資本主義下の最大のアキレス腱＝日本農業部門を〈資本主義的農業の「地主的＝プロシヤ的發展」の途上〉⁴⁶⁾として把握する。

彼ら「講座派の亡霊」批判論者の立論の核心は以上である。さらに、その理論的特質を筆者なりに要約すれば、以下三点の通りとなる。

43) 小山・浅田 [1971] 11-34頁 (小山弘健の執筆部分)

44) 神山 [1947] 35-120頁

45) 神山 [1947] 1-34, 121-218頁

46) 神山 [1947] 1-34, 121-218頁

①その「レーニン理論」信奉＝祖法遵守主義における資本主義＝帝国主義分析の方法論。彼ら「講座派の亡霊」批判論者に特徴的なのは、その徹底した「レーニン理論」基準主義、しかも祖法遵守的なそれにある。それゆえレーニンが旧ロシア資本主義に対して用いた分析方法を、時空を超え、無媒介的に戦前日本資本主義分析に適用しようとする傾向が生じることは否み難かった。

②その「一国内の・下からの」市場形成を基準とする戦前日本資本主義分析の徹底性。彼ら「講座派の亡霊」批判論者に特徴的なのは、戦時下における講座派「亜流」の誤謬——戦前日本資本主義は半封建的土地所有制に支えられてのみ成立し得ているゆえ、そこに打撃を加え得る限り、軍部・官僚と政策的に提携し得るとしたそれ——に対する反発ゆえ、何より日本国内における「下からの」自生的な資本主義的発展の契機の芽を掬い上げて行こうとする強烈な姿勢にある。それは一面で積極的な意義を持った。しかし、逆に「世界史的連繫」下に国際的な契機を論理の核心に取り込んで戦前日本資本主義を把握しようとする姿勢は後景化せざるを得なかった。

③その「軍・封・帝国主義」基準における「二重の帝国主義」としての戦前日本帝国主義分析の徹底性。彼ら「講座派の亡霊」批判論者に特徴的なのは、15年戦争下の労苦を映し、軍事的で警察的な絶対主義的天皇制の国家権力に対する分析を、レーニンが「社会主義の分裂と帝国主義」⁴⁷⁾ [1916]において戦前日本帝国主義の特徴づけに用いた「日本とロシアとでは、軍事力や広大な領土の独占、ないしは少数民族や中国その他を略奪

47) レーニン [1916＝1971] 215頁以下。本論文の標題は、原文に忠実に翻訳する限り、「帝国主義と社会主義の分裂」となるが、日本語としては誤読（「帝国主義」と「社会主義」とに「分裂」と読まれてしまう）可能性が大きい。そこで、本稿筆者は以前から本論文の標題を「社会主義の分裂と帝国主義」と表記した方が良いと考えてきた。本論文でレーニンが追究したのは「国際社会主義運動」における「革命的潮流」と「日和見主義的潮流」への「分裂」と資本主義の「帝国主義」段階との「内的連関」についてであったからである。

する特別な便宜の独占が、現代の、最新の金融資本の独占を一部は補足し、一部は代行している」⁴⁸⁾ という指摘、他方、第三インターナショナルが日本支部＝日本共産党に示したいわゆる「32年テーゼ」における「日本においては独占資本主義の侵略性は絶対主義的な軍事的＝封建的帝国主義の軍事的冒険主義によって倍加されている」⁴⁹⁾ という指摘、これらを合体援用し、絶対主義的天皇制国家権力をそれに「固有の物質的経済的基礎」⁵⁰⁾ たる「寄生地主的土地所有制＝半封建的農業生産関係」を持つ、また同じく、その「直接の物質的基礎」⁵¹⁾ たる「国家資本の一大体系」を持つ、以上、双軸的なる経済的基礎を持つ所の——独占資本主義の基礎上に聳える近代的帝国主義とは異なる独自の歴史的範疇たる——「軍事的封建的帝国主義【軍・封・帝国主義】」として規定づけた点にある。

それゆえ、彼らの戦前日本帝国主義論は「軍・封・帝国主義」と「近代的帝国主義」との相克的並立＝言う所の「二重の帝国主義」論となり、多岐にわたる論争を生み出した（志賀義雄による神山茂夫の所論批判で口火が切られるいわゆる「軍・封・帝国主義」論争など）。本稿では唯一点、絶対主義的天皇制国家権力をそれに特有の物質的経済的基礎を持った「軍・封・帝国主義」と規定して行く際、寄生地主制下の半封建的農業ならびに軍事工業中核での国家資本の体系がかかる「軍・封・帝国主義」の経済的基礎とされ、近代的帝国主義の基礎をなす日本資本主義の発展過程分析の検討対象から除外されるという根本的難点を持たざるを得なかったという点のみ、付言しておきたい。

しかし、彼ら「講座派の亡霊」批判論者の所論の何れもが、近代日本史上の深い断層をなす戦前日本帝国主義の15年戦争期に、侵略と弾圧の只中

48) レーニン [1916=1971] 230-231頁

49) 日本共産党中央委員会 [1970] 64頁

50) 小山・浅田 [1971] 61頁（小山弘健の執筆部分）

51) 小山・浅田 [1971] 61頁（小山弘健の執筆部分）

において続けられた実践的＝学問的営為の中から生まれて来たものである以上、そしてまた、彼らが戦地に散った同世代の屍を心に抱いて見詰める先に、戦前日本資本主義の「半封建制」の「打破」を「公力」（軍部や官僚の政策）に求めてそれと「協力」⁵²⁾するまでに退転した戦前講座派の「亜流」（山田の研究に一面的に影響された人たち）⁵³⁾が存在した以上、「講座派の亡霊」批判論者が「戦後初期の段階で『講座派の亡霊』との闘争を主張したことは、戦中派ともいべき当時の若い理論家たちにとっては、けっして無意味なことではなかった」⁵⁴⁾のである。以上、占領下民主主義革命の完遂のためにその桎梏と見定めた『分析』に理論的砲火⁵⁵⁾を集中する「講座派の亡霊」批判論者に対し、山田はいかなる反批判を加えたのだろうか。

まず、この差替に直続する後段において、山田は既に『分析』戦前初版で、ロシア・ナロードニキは「再生産論簡素化」＝〈ロシアにおいて資本主義の発展は無条件に不可能である〉とする見地に立ち、資本主義の消去によって旧ロシアの『軍事的封建的帝国主義』の基本構造と基本矛盾の抹消に帰結したとする。そしてそれと対で、日本において農業の資本主義的な発展を言う労農派は「再生産論固定化」＝〈日本において資本主義の発展は無条件に可能である〉とする見地に立ち、「半隷農」的な日本農業部門の消去によって日本資本主義の〈軍事的半農奴制的〉基本構造と基本矛盾の抹消に帰結したとし、その両面批判を行った所である。

しかし、山田は敗戦直後における「講座派の亡霊」批判論者の登場とい

52) 守屋〔1967〕219頁

53) 守屋〔1967〕222頁

54) 守屋〔1967〕221-222頁

55) この点、小山〔1953〕26-27頁を参照。そこでは「敗戦後の事態」が「労農派」の「あやまを実証」したため、彼らはそもそも「論争参加者たる資格」を「うしない」、むしろ「戦後論争」の「出発点」は「講座派が過去に一応はたした積極的役割をみとめつつ、その理論体系のなかにふくまれた誤びゅうと弱点をいかに克服止揚するかという点」に置かれざるを得なかったと顧みられている。

う事態を受け、上述の両面批判の前提となる基本的な把握の仕方について、この両面批判の直前の箇所で要約的に提示する必要性を認識し、『分析』戦後復刊版の刊行を機にそれを遂行したのである。その際、選ばれたのが、1935年冬の講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」の「特殊具体の部」の結論の要約だったのである。

そこでは、戦前日本資本主義が工業部門と農業部門とで相異なる二つの再生産構造を有し、そのドッキングにより成り立つ重層構造（『分析』において「構成」という用語は「重層構造」の意味で用いられている—筆者注）を持っている事が正面から示される。

すなわち、山田はここで極めて端的に、①〈狭義の戦前日本資本主義（＝資本が直接支配する工業部門）〉は高度の「軍事的＝独占的」な再生産「構造」を持つ資本主義であると規定する。周知のレーニン『帝国主義論』の諸規定を念頭に置きつつ、戦前日本もまた紛れもなく高度に発達した独占資本主義であると規定するのである。同時にここで、山田は「軍事的＝独占的」として「軍事」と「独占」とを「＝」で結び、戦前日本資本主義の再生産構造を、高度に独占的な再生産構造であり・且つ・高度に軍事的な再生産構造でもあると、二重性において把握する。ここで軍事的とは〈強力的〉⁵⁶⁾と換言し得る。山田は、戦前日本資本主義の全体の内、資本が直接支配する工業部門＝〈狭義の戦前日本資本主義〉の再生産構造が独占的であるとともに軍事的＝〈強力的〉であると把握したのである⁵⁷⁾。この差替部分の原典である1935年冬の講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」の「講演手控え」における「独占高位、(戦争に貫か

56) 中根〔2024〕178頁

57) 中根〔2024〕186-187頁を参照。尚、本稿筆者は処女論文たる中根〔1999〕の「IV『分析』とローザ「帝国主義論」視角」において問題を提起して以来、一貫して山田『分析』をローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』の《純経済過程と政治的暴力の連関把握》視角の理論的継承者と位置づけている。

れた循環)⁵⁸⁾なる摘録がそれを明証する。

言うまでもなく、この把握は1935年（講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」）時点のものである。しかし、山田はこの把握を1949年（『分析』戦後復刊版の刊行）時点から顧みても有効な把握であると認識し、差替箇所摘録したのである。尚、『分析』でストレートに「軍事的=独占的」資本主義なる規定が示されるのは、唯、この箇所においてのみである。

以上より、山田は「講座派の亡霊」批判論者の所論を十分念頭に置きつつ、国家資本（軍事機構=キイ産業を中心とするそれ）を挙げて「軍・封・帝国主義」=絶対主義的天皇制に専属する物質的基礎とし、戦前日本資本主義の分析対象からはこれを除外するという彼らの立論について、それが昨日までの戦時下における絶対主義的天皇制国家権力の無制限の暴威に直面しての止むを得ざる立論の仕方であると受け止めつつ、しかし理論的把握の仕方としては根本的な誤謬に陥っている旨、端的に指摘したのである。

同時に、山田はもう一つ極めて端的に、②〈狭義の戦前日本資本主義（=資本が直接支配する工業部門）〉の外側に、その「基砥」として「半封建的土地所有制」下の「半隷農的零細農耕」の再生産「構造」が成立するに至っていると把握する。山田にとり、それは決して自生的な封建的要素なのではない。逆に文字通り、戦前日本資本主義が自らの必要により、戦前日本資本主義の発足と「同時的」に「相互規定的」に「強力的」⁵⁹⁾に創出した所の、その限り〈人為的〉に〈再出〉⁶⁰⁾された封建的要素である。戦前

58) 山田 [1935=1985] 8頁を参照。ここでは「軍事的半農奴制的帝国主義 一、顛倒的、二、独占高位、(戦争に貫かれた循環)」と摘録されている。

59) 『分析』岩波文庫版（現行=山田没後版）225頁

60) 『分析』岩波文庫版（現行=山田没後版）216頁を参照。ここでは極めて端的に「半隷農的現物年貢の徴収とそれの農業部面外での資本転化」は「半隷農主的寄生地主的関係」の「永続」の「要因」と断言される。

日本資本主義において「基柢」とは資本が間接支配する農業部門のことを指すのである。

この点に関わって、刊行以来90年を超える山田『分析』をめぐる論争史において必ずしも明確な答えが出されていない、『分析』における「半農奴（隷農）制的」ないし「半封建的」なる規定の「半」の含意について、本稿筆者は、それが一般的に封建制から資本主義への移行の度合いを測った規定では決してなく、逆に、特殊に戦前日本資本主義の生成とともに〈人為的〉に〈再出〉された封建的要素を指す規定であるとつかんでいる。「半」とは端的に言えば〈人為的〉の謂いなのである。

こうして山田は、上記①・②を総括し、③〈広義の戦前日本資本主義の重層（工業部門＝資本の直接支配，農業部門＝資本の間接支配）構造⁶¹⁾〉を指して「軍事的半封建的資本主義」としての「構成」が「成立」していると言い切るのである。山田は「講座派の亡霊」批判論者の所論の全像を十分念頭に置き、彼らの立論の論理的核心を成す「軍・封・帝国主義」＝絶対主義的天皇制（および絶対主義的天皇制に専属する物質的基礎としての寄生地主的半封建的土地所有制と軍事工業基軸の国家資本を含む）という把握の仕方（後述する「【補項】「講座派の亡霊」批判論の論理的核心について」を参照）、それがもたらさざるを得ない、戦前日本資本主義分析の空無化、その根本的誤謬を端的に衝いたのである。

尚、ここで最後に、それほど非自律性を戦前日本資本主義に刻印した決定的要因を顧みておく。『分析』の「序言」での「各国資本主義」との「対比」における戦前日本資本主義の「世界史的低位」⁶²⁾の指摘がそれである。

61) ここで想起すべきは、山田が『分析』の当初題名を『日本資本主義 特に工業（左記四文字は異形活字―筆者注）分析』（原〔2016〕13.15頁）としていたという事実であり、同時に「第三編 基柢」を「餘編 基柢」（原〔2016〕13.15頁）としていた事実である。

62) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）「序言」8-9頁

そこでは、先行のイギリス資本主義、フランス資本主義、ドイツ資本主義、旧ロシア資本主義、別にアメリカ資本主義、これらの内、新世界＝アメリカ資本主義を除く全てが〈絶対主義〉段階から資本主義への移行を成し得て行くのに対し、ひとり日本のみは〈徳川封建専制〉段階から〈先進資本主義諸国の外圧下〉に資本主義への移行を開始せざるを得なかったと把握される。かかる「世界史的低位」＝世界史的規定性（しかも帝国主義段階への移行前夜）の決定的重視⁶³⁾、これこそが山田『分析』の方法的基礎であったのである。

山田のこの把握の仕方は、特にレーニン『ロシアにおける資本主義の発達』を祖法遵守的に受容した「講座派の亡霊」批判論者の立場からは到底、理解不能であっただろう。その視野を〈一国資本主義〉の〈国内市場形成〉如何に絞りこみ、その限り、資本主義は封建制打破の担い手であるはずだと言う〈一国的・単線的・継起的な段階的發展の歴史観〉からは決して生まれ得ない把握の仕方だからである。

しかし我々が今、注意深く『分析』本文の冒頭章句を見つめるなら、そこに山田の凜冽たる分析開始の宣言を、すなわち「自由競争の祖国」英国（＝マルクス『資本論』基準）、「集中独占の本場」独・米（＝レーニン『帝国主義論』基準）を遙かに見据え、まさしくそれに比肩する「世界史的意義」を「画」する資本主義として「軍事的農奴制的＝半農奴制的の典型国」露・日を捉え、かかる「世界史的意義」を持つ「軍事的」—「半農奴制的」—「典型国」日本資本主義総体との思惟の力による正面对峙＝格闘を開始しようとする宣言を見る事ができる。この時、山田が見詰める先には、西欧近代基準の継起的發展史観では測り切れぬ、〈アジアの世界〉⁶⁵⁾の

63) 尚、この点に関して、長岡〔1980b〕は山田『分析』の「方法上」の「限界」を「一国史観」にある（北海道大学『経済学研究』第30巻3号25-26頁）とするが、本稿の行論の通り、本稿筆者は山田『分析』＝一国史観論には全く与し得ない。

64) 『分析』岩波文庫版（現行＝山田没後版）23頁

〈強力的〉⁶⁶⁾ な日本資本主義が聳えていたのである。

けれども「講座派の亡霊」批判論者も、彼らが山田『分析』を批判対象に定める根因となった講座派「亜流」の戦時下の理論的退転に対し、半歩の前進を示し得たと言い得る。なぜなら、彼ら「講座派の亡霊」批判論者は『分析』の戦前日本資本主義像（さらには戦前日本帝国主義像）を正面に見据えながら、それに対置すべく彼らなりのトータルな戦前日本帝国主義像を懸命に築き上げようとしたのだから。以上を要するに、かつて戦時下に講座派「亜流」が陥った誤謬に対し、『分析』の「胸を借りて」⁶⁷⁾行われた彼ら「講座派の亡霊」批判論者の『分析』批判は、敗戦日本でのマルクス主義理論戦線の新たな前進に向けた避け得ない挑戦であったと言い得る。そして、山田盛太郎その人もまた、それを受け止めていたように思われる。

【補項：「講座派の亡霊」批判論者の論理的核心について】

本稿では「講座派の亡霊」批判論者として神山茂夫・小山弘健・豊田四郎・浅田光輝の諸氏の所論を念頭に置く旨、すでに述べた通りである。そして本稿の主題に必要な範囲で諸氏の所論を紹介＝検討した所である。この補記では、本稿の本筋からはやや外れるが、しかし本稿の問題意識と深

65) 後藤〔2004〕末尾の「付属資料」の中の「資料Ⅳ」の内において、南克巳は『『アジア的世界』への「特殊＝具体化」の「典型例」たる「山田盛太郎『日本資本主義分析』と、21世紀初頭〈ポスト冷戦〉世界に立ちつつ『分析』を改めて規定づけ返している。

66) 中根〔2024〕178頁

67) 豊田〔1985〕156頁、そこでも再度、豊田は自身の「講座派の亡霊について」発表から四十年を経て、当時の彼による『分析』批判が、『分析』の『胸を借りて』青年期をおくった豊田自身が「敗戦直後の革命的高揚期」に際会して行わざるを得なかった「已むにやまれぬ『自己批判』」だったと記し、豊田〔1949〕の「跋」と同様の認識を吐露している。

尚、1985年時点の豊田の認識では、「講座派の亡霊」批判論者による『分析』批判は「日本資本主義の経済構造における封建的残存物をめぐる評価」に関するかぎり、戦前講座派以来の学問系統の「内部的な論争以外のなにもでもありませんでした」（豊田〔1985〕157頁）と回顧され、豊田自身、戦前講座派の学問系統の中の一人であると自己認識している。

い関わりを持つ「講座派の亡霊」批判論者の論理的核心理論について短く言及する。

上述の通り、彼ら「講座派の亡霊」批判論者が『分析』のそれに対置して打ち出した戦前日本資本主義—戦前日本帝国主義の全体像は、①戦前「絶対主義的天皇制国家」＝レーニンの「軍事的封建的帝国主義」論を立論の軸とし、戦前日本帝国主義の全政治過程を天皇制＝「軍・封・帝国主義」と独占資本＝「近代的帝国主義」との矛盾に満ちた相克的並立の過程として把握（いわゆる「二重の帝国主義」論）し、②「国内市場の形成」を基準として「諸経済制度（ウクラッド）の複合体」として戦前日本資本主義を捉え、「日清戦争」によって「上から」の「近代的国民経済」の「統一」が「完成」⁶⁸⁾されたとして、そこに産業資本確立の画期を把握し、③その下で、日本農業部門はレーニンの資本主義的農業の「地主的＝プロシヤ的發展」コースを歩んだと把握し、以上その何れもが『分析』の把握に対するアンチテーゼを成している所である。

が、ここで本稿筆者が言及するのは、以下の点である。すなわち、往時の彼ら「講座派の亡霊」批判論者自身でさえ、必ずしも明瞭に意識していなかったと思われるにも関わらず、上記三点の主要な把握において、実の所、まず③戦前日本農業部門における資本主義的農業の「地主的＝プロシヤ的發展」把握は、②戦前日本資本主義における「国内市場の形成」把握の裡に統合され、次に、②戦前日本資本主義における「国内市場の形成」把握を彼ら言う所の「純粹性」において、つまり彼らが「副次的」なものとなした〈外国市場〉と〈国家資本〉とを検討対象の外に放逐しつつ成し遂げるために、その両者とも①絶対主義的天皇制国家＝「軍・封・帝国主義」に専属する経済的基礎として位置づけることを通じ、最終的にはその論理構成上、彼らの所論の成否は挙げて「軍・封・帝国主義」論にかか

68) 豊田 [1952] 226頁

らざるを得ない内実を持つに至ること、これである。

世上、彼ら「講座派の亡霊」批判論者の理論的中核は「国内市場形成理論」にあるとされることが圧倒的多数⁶⁹⁾なのであるが、彼らの所論の全体像に照らす限り、実は、その論理的中核に位置するのは「軍・封・帝国主義」論以外にはあり得ないのである。

今、彼らが問題提起した戦前日本帝国主義に対する「二重の帝国主義」規定、特に、その双軸的把握における主導的翼を成す「軍・封・帝国主義」規定についてこれ以上の立ち入った検討を行うことはできない。が、彼らが果たした理論的貢献の一つについてだけ触れる。それは日清戦争(1894-95年)の性格規定についてである。

日清戦争⁷⁰⁾の性格規定は、日本資本主義の成立画期の規定の仕方との関連において、戦前講座派内部においても見解が分かれ、例えば、野呂栄太郎は「産業革命の進展」とともに「国民的統一」を「完全」⁷¹⁾ならしめた所の戦争であるとして〈日清戦争＝国民戦争〉と把握し、他方、山田盛太郎は「計画的＝組織的」な「産業資本『的なもの』の発動」⁷²⁾になる戦争であるとして〈日清戦争＝初期産業資本の発動による戦争〉⁷³⁾と把握し、

69) この点、最近においても、例えば、長原豊ほか編著〔2023〕229-230頁(沖公祐の執筆部分)で『分析』をめぐる戦後段階の論争の嚆矢として「講座派の亡霊」批判論者(具体的には豊田四郎)の所論が取り上げられている。そしてレーニン「市場形成表式」を基準とする彼らの「国内市場形成理論」への言及がなされている。しかし、それと一対で触れられるべき彼らの「軍・封・帝国主義」論への言及は見当たらない。確かに表層的には「国内市場形成理論」が彼らの理論的中核であるように見えもするのであるが、攻究すべきは彼らの理論の個々の構成要素が相互連繫の下で占める地位の違いについてであると思われる。

70) 尚、日清戦争を総体的に把握しようとする際、加藤〔2009＝2016〕95-164頁は好適の参考書である。

71) 野呂〔1930＝1983〕124頁

72) 山田は『分析』刊本においては(その原初稿たる『講座』論文の刊本においても)、日清戦争について「計画的＝組織的」な「産業資本『的なもの』の発動」になる戦争という位置づけに留めた。しかし、実は山田は、その『講座』論文の或る草稿において「日清役の計企的＝組織的、侵略的性質(軍事的半農奴制的な産業資本的性質)」(中根〔2022〕423.427頁の注35)と摘録している。この点、止目すべきである。

73) 『分析』岩波文庫版(現行＝山田没後版)48頁

また別に、服部之総は「日清戦争＝国民戦争論」は「一片の根拠もない」⁷⁴⁾と断じ、「朝鮮問題」を巡る「日支新抗争」では「いかなる国民主義的契機」も「日本については之を云うことをえない」⁷⁵⁾として〈日清戦争＝非・国民戦争〉と把握し、以上、代表的見解のみを見ても鋭く見解が分岐した所である。

ここで、この点につき、例えば「講座派の亡霊」批判論者の内で主に「軍・封・帝国主義」論の部面から論陣を張った浅田光輝は日清戦争を「軍・封・帝国主義」(＝絶対主義的天皇制)が日本の「国民経済を統一」すべくして「発動」した対外「侵略」⁷⁶⁾戦争であるとして、〈日清戦争＝天皇制「軍・封・帝国主義」の国民経済統一のための侵略戦争〉と把握する見地を対置して論争に参加した。それは日清戦争の侵略的性格を、絶対主義的天皇制の過渡的な役割と連動させ、かつ、国民経済統一を目指す戦争が同時に侵略戦争になる場合があり得るという把握の仕方を示した点で、今日においても尚、決して打ち棄てられるべきではない所論⁷⁷⁾であると思われる。

彼ら「講座派の亡霊」批判論者が『分析』批判を企図しつつ打ち出した戦前日本帝国主義の「二重の帝国主義」規定、その主導的翼を成す「軍・

74) 服部 [1932] 11頁

75) 服部 [1932] 12頁

76) 浅田・小山 [1971] 164-165頁 (浅田光輝の執筆部分、尚、初出は1949年である)

77) この点、長岡 [1980b] は「講座派の亡霊」批判論者の理論的長兄と言い得る神山茂夫における「軍・封・帝国主義」論およびそれを軸心とする「二重の帝国主義」論の成立過程を詳細に追跡し、その総括的評価 (北海道大学『経済学研究』第30巻3号25頁)として、「二重の帝国主義」論は、①天皇制を「絶対君主制」と規定しながらも「あくまで」も「近代の帝国主義」を「代位」する「日本帝国主義の権力」と把握した点で「日本帝国主義論史」上に「重要な意味」を持ち、②「現実感覚」の面でも「理論水準」の面でもかつての『マルクス主義』誌上の論客を「抜いて」いたとする。しかし、にも関わらず、③その「世界史的視角」を後景化させた「一国史観」性のゆえに、「今日」時点からは「戦前期日本帝国主義」の「分析方法」に「付け加える」べき「なにもの」も「もっていない」と結論している。しかし本稿筆者は、仮に、狭く神山自身においてはそうであったとしても、彼が提起した「軍・封・帝国主義」論およびそれを軸心とする「二重の帝国主義」論は、例えば、浅田が行った日清戦争の把握の仕方において「付け加える」ものを持っていると考える。

封・帝国主義」論——「講座派の亡霊」批判論者の所論の論理的核心理念——は、今日、尚、精査すべき未決点を包蔵しているのである。その点からも、「講座派の亡霊」批判論者の展開した諸議論は、『分析』批判としては概ね失当であったにせよ、今日の我々が汲み取るべき貴重な理論的到達点を刻んだと言い得るのである。この点、本稿筆者は高く評価するものである。

Ⅲ 結語

以上、本稿は『分析』戦後復刊版における三つの差替を挙示し、その各々に関する山田自身の位置づけを検討し、その上で、各々の差替が有する歴史的含意を考察した。そして、何れの差替も『分析』戦前初版の刊行以降の現実の歴史の進行、またそれを反映した日本資本主義把握を巡る諸論争の熾烈化、特に「講座派の亡霊」批判論者による批判論点の提示を受けたものであり、『分析』戦前初版を理論的に補強する意味を持つと主張した。

特に、①1930年代の日本綿業の世界大の展開は『分析』戦前初版での当該産業に関する山田の認識の再検討を迫るものであり、この現実歴史の進行を受けた山田の認識の深化が戦前日本資本主義の経済的動脈たる繊維産業＝「根帯」規定に結実している点、②資本主義世界体制の戦後<冷戦帝国主義>段階への推転の兆しを感得しながら、『分析』戦前初版での「世界的連繫」下における戦前日本資本主義把握という見地を、「世界資本主義」の「構造」の一環としての戦前日本資本主義把握として再度の確認を行っている点、③敗戦直後、いわば戦時下の無念を背負い、戦前講座派の流れの只中から生じた「講座派の亡霊」批判論者に対し、戦前1935年冬時点の講演「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」の「特殊具体の部」を要約して摘録するという方法を採用しつつ、反批判を行っている点、以上の諸点に照らし、『分析』戦後復刊版は戦前初版の単なる復刊では決して無く、それに独自の意義を背負って『分析』変遷史の裡に屹立

していると言い得る。

最後に。論じてきた三つの差替は何れも山田の鋭い現実対峙の姿勢に発するものである。敗戦直後、焼け野原の祖国に立った山田は、「軍封揚棄」を「敗戦と占領」の形でしか果たし得ず、「戦後再建」も『『冷戦』体制』に委ねざるを得ないという、この「二重に犯された」⁷⁸⁾ 歴史を日本が歩むか否かの歴史的岐路に立った。

その時、山田はためらわず、『分析』の著者として帝国主義アメリカ占領軍の検閲に対峙し、また農地改革中央委員として旧日本支配層の一角をなす寄地主制に対峙し、さらに『日本資本主義発達史講座』の編者の一人として「講座派の亡霊」批判論者の激越な批判に対峙し、同時に三正面の対峙を敢行したのである。

そして『分析』に対する毀誉褒貶の波が逆巻く中、山田は、かつて『分析』戦前初版の扉に記そうとしながらも弾圧を危惧する書店の説得を受け、遂に公に記し得なかった心友、亡き岩田義道⁷⁹⁾ への献辞―「同郷同学今は曾畔に眠る Y の霊に捧ぐ」⁸⁰⁾ ーを胸に抱くが如く、ひたすら学問の険路を歩み続けた。その燃える軌道の彼方に三箇所の差替は刻まれている。(2025年8月29日脱稿, 11月29日補筆改稿)

78) 南〔1976〕12頁

79) 岩田義道は山田の一歳年下の心友。山田との交友を機縁にマルクス主義思想に開眼し、第三インターナショナル日本支部＝日本共産党に入党、のち中央委員となり、当時の日本帝国主義の中国侵略戦争に反対する闘争に挺身した。1932年11月、闘争の最中、特別高等警察の拷問により絶命。山田は生涯、彼との交友への思いを胸に生きた。

80) 長岡〔1984〕172頁

【主要参考文献：五十音順】

- 浅田光輝・小山弘健〔1971〕『天皇制国家論争』三一書房
- 大石嘉一郎〔1998〕『日本資本主義の構造と展開』東京大学出版会
- 大内力〔2000〕『大内力経済学大系』第7巻『日本経済論（上）』東京大学出版会
- 大島雄一〔1982〕『『日本資本主義分析』の軌跡—「再生産論の具体化」と構造論＝危機論—』土地制度史学会『土地制度史学』第94号所収
- 加藤陽子〔2009＝2016〕『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』新潮文庫
- 神山茂夫〔1947〕『日本資本主義分析の基本問題』岩崎書店
- 後藤康夫〔2004〕「戦後生産力の独自の性格—情報革命とグローバリゼーションへの展望—」福島大学国際経済研究会編『21世紀世界経済の展望』八潮社所収
- 小山弘健〔1953〕『日本資本主義論争史（下）』青木書店
- 豊田四郎〔1949〕『日本資本主義構造の理論』岩崎書店
- 豊田四郎〔1952〕『日本資本主義発達史（上）』青木文庫
- 豊田四郎〔1985〕「メモワール・日本資本主義論（Ⅱ）——国資本主義構造の特殊性をめぐって—」新日本出版社『科学と思想』第55号所収
- 長岡新吉〔1980a〕『『日本資本主義分析』の歴史と論理——一つの「講座派」批判—』社会評論社『経済学批判』第8号所収
- 長岡新吉〔1980b〕『『二重の帝国主義論』の成立（1）・（2）』北海道大学『経済学研究』第30巻1号・同巻3号所収
- 長岡新吉〔1984〕『日本資本主義論争の群像』ミネルヴァ書房
- 中根康裕〔1999〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の原像」基礎経済科学研究所『経済科学通信』第90号所収
- 中根康裕〔2022〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の草稿の検討」法政大学『経済志林』第89巻3号所収
- 中根康裕〔2023〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』「紡績業の興隆」項の草稿について—草稿に記された戦後時点の加筆痕にも触れて—」法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』第781号所収
- 中根康裕〔2024〕「ローザ・ルクセンブルクと山田盛太郎『日本資本主義分析』」法政大学『経済志林』第92巻3号所収
- 長原豊ほか編著〔2023〕『「論争」の文体—日本資本主義と統治装置—』法政大学出版社
- 日本共産党中央委員会〔1970〕『日本共産党綱領問題文献集』
- 野呂栄太郎〔1930＝1983〕『日本資本主義発達史（上）』岩波文庫

- 服部之総〔1932=1982〕「条約改正及び外交史」野呂栄太郎ほか編『日本資本主義発達史講座』全7巻，岩波書店，第3回配本所収
- 原朗〔2016〕『『日本資本主義分析』原稿の一考察—山田盛太郎関係資料の検討—』政治経済学・経済史学会『歴史と経済』第230号所収
- 守屋典郎〔1967〕『日本マルクス主義理論の形成と発展』青木書店
- 南克巳〔1970〕「アメリカ資本主義の歴史的段階—戦後＝「冷戦」体制の性格規定—」土地制度史学会『土地制度史学』第47号所収
- 南克巳〔1976〕「戦後重化学工業段階の歴史的地位—旧軍封構成および戦後＝「冷戦」体制との連繫—」有斐閣『新マルクス経済学講座』第5巻（同巻副題「—戦後日本資本主義の構造—」）所収
- 南克巳〔1977〕山田盛太郎『日本資本主義分析』岩波文庫版「解説」
- 南克巳〔2003〕『『ひとつの歴史図式』への補足—『20世紀末大旋回』把握めぐる論議の素材提供までに』福島大学国際経済研究会編『21世紀世界経済の展望』の上掲後藤論文末尾に収載，八朔社所収
- 山田盛太郎〔1934戦前初版/1949戦後復刊版/1977岩波文庫版初刷（山田生前版）〕『日本資本主義分析—日本資本主義における再生産過程把握—』岩波書店
- 山田盛太郎〔1935=1985〕講演手控え「再生産表式と地代範疇—資本主義経済構造と農業形態—」『山田盛太郎著作集』別巻所収
- 山田盛太郎〔1947=1984〕「再生産表式と地代範疇—日本経済再建の方式と農地改革の方向とをきめるための一基準—」同『著作集』第3巻所収
- 山田盛太郎〔1964=1984〕「戦後再生産構造の段階と農業形態— $Iv+m=IIc$ および蓄積のSchemaの崩壊と再編—」同『著作集』第5巻所収
- 山田盛太郎〔1968=1985〕講演手控え「戦後日本の再生産構造の特質」同『著作集』別巻所収
- 吉原泰助〔1984〕「箴言」『山田盛太郎著作集』「月報2」所収
- ルクセンブルク，ローザ〔1913〕長谷部文雄訳〔1934〕『資本蓄積論—帝国主義の経済的説明への一寄与—』岩波文庫（上・中・下）
- レーニン，ウラジミール，イリイチ〔1916=1971〕「帝国主義と社会主義の分裂」，栗田賢三訳『カール・マルクス 他十八編』岩波文庫所収

A Study on the Unique Historical Implications of
the Postwar Reprint Edition of Moritaro Yamada's
The Analysis of Japanese Capitalism

Yasuhiro NAKANE

《Abstract》

In this paper, an attempt to grasp the Unique Historical Implications of the Postwar Reprint Edition of Moritaro Yamada's *The Analysis of Japanese Capitalism* is presented. In Yamada's *The Analysis of Japanese Capitalism*, the Postwar Reprint Edition, the text was replaced in three places.

Of the three changes, the first one was an addition that reflected historical facts after *The Analysis of Japanese Capitalism* was published.

The second resisted censorship by the imperialist American occupation forces of *The Analysis of Japanese Capitalism* and replaced the original text with another.

The last replacement was a new sentence as a counter-criticism to some exciting criticism of *The Analysis of Japanese Capitalism*. It was a counter-criticism against the "criticism against the ghost of the Koza-ha" that was born from within the "Koza-ha".

In summary, the Postwar Reprint Edition of Moritaro Yamada's *The Analysis of Japanese Capitalism* has Unique Historical Implications.

